

TOP NEWS

令和6年度 北海道大学病院 地域連携懇話会を開催

北海道大学病院地域医療連携福祉センター長 榎原 純

2024年11月22日(金)に、令和6年度北海道大学病院地域連携懇話会を、京王プラザホテルにて開催致しました。この会は、当院のような高度急性期病院と後方病院との密な連携を図ることを目的として、毎年この季節に開催しております。昨年度に引き続き、今年度も対面で開催し、132名(院外99名・院内33名)もの方々にお集まりいただきました。今年度のテーマは、「認知症に関する対応や取り組み」とし、下記5名の方にご講演をいただきました。

1. 「北海道大学病院パーソナルヘルスセンターの紹介」
(北海道大学病院 パーソナルヘルスセンター部長 今野 哲 医師)
2. 「北海道大学病院における認知症診療」
(北海道大学病院 軽度認知障害センター部長 矢部 一郎 医師)
3. 「地域で見守る認知症
～砂川市認知症初期集中支援チームの取り組み～」
(砂川市立病院 認知症疾患医療センター 福田 智子 看護師)

4. 「認知症治療病棟における PSWの役割と取り組み」
(桜台明日佳病院 森下 佳奈 精神保健福祉士)
5. 「認知症
困難症例に対する訪問診療・訪問看護の取り組み」
(りんごの木クリニック 院長 稗田 翔平 医師)

講演を通して認知症の予防、治療、実際の対応についてご講演をいただき理解を深めることができました。懇話会終了後の懇親会において、より活発な意見交換が行われ、関係施設の皆さまとの親睦を深めることができた実感しております。

来年度も本センターでは、懇話会の開催を予定しておりますので、多くの皆様にご参加いただけますと幸いです。引き続き、本センターへのご支援を賜りますと幸いです。



渥美病院長 開会挨拶



パーソナルヘルスセンター 今野医師



懇親会の様子



軽度認知障害センター 矢部医師



砂川市立病院 福田看護師



桜台明日佳病院 森下精神保健福祉士



りんごの木クリニック 稗田医師

外来診療のご紹介

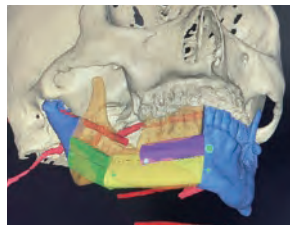
形成外科は、ケガや腫瘍あるいは生まれつきの疾患などにより身体に生じた欠損や変形を、様々な手術手技や特殊技術を駆使して機能と形態を再建・修復することで、皆様の「生活の質“Quality of Life(QOL)”」の向上を目指す外科系の診療科です。北海道大学形成外科は、1978年に国立大学では東京大学に次いで2番目に形成外科診療科が新設された、最も古い歴史を有しています。幅広い診療を行い国内でもトップクラスの実績を誇っており、今後も北海道の医療にさらなる貢献をしております。

対象疾患

形成外科の治療対象は、熱傷や切り傷・擦り傷・顔面骨骨折などの外傷、唇顎口蓋裂・頭蓋骨早期癒合症・小耳症・副耳・多指症・合指症などの先天性形態異常、顎変形症、皮膚や皮下組織の腫瘍、傷跡・ケロイド、床ずれや下肢の皮膚潰瘍、でべそ、あざ、そして乳房再建などの術後組織欠損の再建など、多岐にわたります。以下に専門領域ごとに、当科の治療内容と特徴を示します。

腫瘍・再建外科

皮膚腫瘍：皮膚腫瘍は形成外科において最も多く取り扱う疾患です。単なる病変部の切除のみならず、傷跡や変形を可能な限り目立たせないように最大限配慮した手術を行なっています。悪性腫瘍の治療も積極的に進んでおり、外科的切除とリンパ節の探索による転移の制御、最新の薬剤治療である分子標的薬など、多角的かつ先端の治療を推進しています。近年進歩が著しいコンピュータシミュレーション技術をいち早く導入し、精度の高い再建手術にも力を入れています。



コンピュータシミュレーションを用いた下顎の再建症例

乳房再建：乳がんが失われた乳房を人工乳房(シリコンインプラント)で再建する治療方法も現在では保険適応になっています。当科では乳腺外科と共同で、乳がん術後の乳房再建に対して、なお一層の取り組みをしています。

頭蓋顔面外科

唇裂・口蓋裂：顔面の先天性形態発育不全のうち最も頻度の高い唇裂・口蓋裂の治療には医科・歯科の専門家によるチーム医



療が欠かせません。当科では30年以上にわたりこのチーム医療を推し進めてきており、現在は組織名を「顎顔面ユニット」とし、医科歯科合同の特殊外来で最善の治療を提供しています。また、唇顎口蓋裂を初回の1回の手術で閉鎖を完了させる「一期手術」に取り組んできており、安定した良好な治療成果を上げています。



唇顎口蓋裂症例

頭蓋骨早期癒合症：生まれつき頭蓋骨の発育障害をきたす疾患で、頭蓋骨を拡大・形成する手術が必要な場合があります。当科と脳神経外科による合同外来「クラニオ外来」を設置し、この特殊疾患に対する先端治療を推進しています。また、「赤ちゃんの頭の形外来」を開設し、赤ちゃんの頭の変形についての診断を行っています。

創傷、難治性潰瘍

創傷とは、いわゆる「キズ」と呼ばれるもの一般を指します。当科では熱傷や、切り傷、擦り傷等の外傷をはじめとするキズだけではなく、様々な原因でなかなか治らないキズ、すなわち「難治性潰瘍」に対しても、各種の外用剤、創傷被覆材、陰圧閉鎖療法などの新しく開発された創傷治療手段を駆使した専門的治療を行っています。

整容・美容外科

高齢化社会に突入した現代社会においては、「シワ」「シミ」「皮膚のたるみ」を整容することによって心の改善を図り、潤いのある充実した生活を提供することが医療機関における重要な役割のひとつとなっています。当科では 2005 年に、道内の他の基幹病院に先駆けて「整容・美容外科」を併設し、先端的な美容外科技術の開発や、高齢者のQOLの向上を目指した抗加齢医療を提供しています。

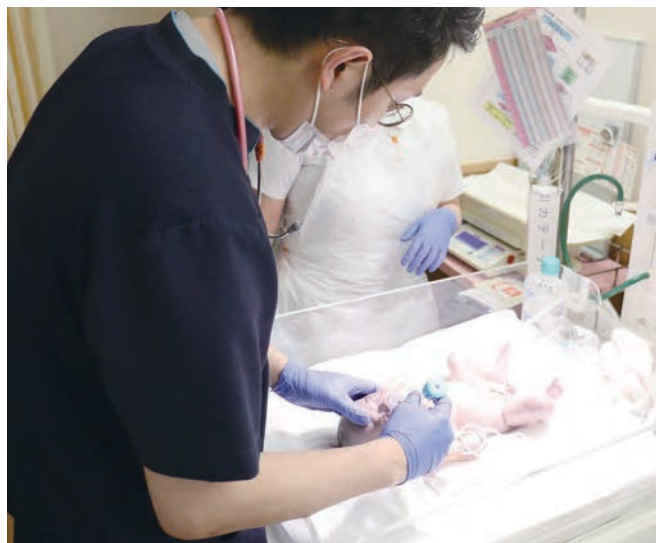
	月曜日	火曜日	水曜日	木曜日	金曜日
新来	午前 -	○	○	○	-
再来	午前 -	○	○	○	-
	午後 -	-	-	-	-
特殊外来	午後 -	腫瘍外来(月2回) 前田 拓・石川耕資 整形美容外科・乳房再建外来(月1回) 山本有平・舟山恵美 赤ちゃんの頭の形外来 三浦隆洋	他科再建外来(月1回) 前田 拓	唇裂(CL)外来(月2回) 舟山恵美・三浦隆洋・岡本 亨	-
	午後 -	クラニオ外来(月1回) 三浦隆洋・杉山 拓 (@脳神経外科外来)	-	顎顔面(MF)外来(月2回) 大澤昌之・舟山恵美・三浦隆洋・歯科担当医 口蓋裂(CP)外来(月1回) 舟山恵美・三浦隆洋・西澤典子・今井智子 (@耳鼻咽喉科外来) 血管腫・血管奇形(HE)外来(月1回) 石川耕資	-

産科外来のご案内

当院ではリスクの有無に関わらず全ての妊婦さんを受け入れ、安心・安全なお産ができるようサポートしています。また、大学病院である利点を生かし、母体・胎児合併症などをもつハイリスクの妊婦さんの受け入れを積極的におこなっており、他科と連携しながら妊娠中から出産まで最適な医療を提供できるような体制を整えています。産後のことについても妊娠中から相談し、必要があればメディカルソーシャルワーカーや地域の保健センターと連絡を取っています。

一般産科外来（毎週月・水・木曜日）

産婦人科専門医が担当します。複数主治医制を採用しており、胎児異常や母体合併症をもったハイリスク妊娠に関しても日々のカンファレンスで患者さんの情報を共有しながら、よりよい治療方針を提示できるようにしています。



妊娠前相談（毎週火・金曜日）

今般、成育基本法に基づく成育医療等基本方針において、プレコンセプションケア（女性やカップルを対象として将来の妊娠のための健康管理を促す取り組み）が推進されています。当院産科では、相談窓口として「妊娠前相談外来」を開設し、妊娠を希望している女性をご自身の生活や健康・病気と向き合い、妊娠前から準備ができるよう情報提供しております。

自由診療でおこなっております。詳しくは当院産科ホームページをご覧ください。



妊娠と薬外来（随時）

妊娠中や妊娠を希望される女性で、妊娠・授乳中の薬物治療に関して不安を持つ方の相談に対応することを目的として2005年10月に妊娠と薬情報センターが国立成育医療研究センター内に設置されました。当院は妊娠と薬情報センターの拠点病院として、国立成育医療研究センターと連携をとり、科学的に検証された最新の医薬品情報を相談外来にて提供しています。オンラインでの対応も可能となっております。ご予約方法は当院産科ホームページをご確認ください。

胎児心エコー外来（毎週木曜日）

心疾患をもつ胎児は100人に1人とされています。生まれる前から心疾患のことが分かっていたら、胎児のために最もよい方法（分娩施設、分娩方法、出生後の治療）をあらかじめ御相談することができます。当院では妊婦健診による一般的な超音波スクリーニングとは別に、胎児心臓病学を専門とする小児循環器医が胎児心臓超音波検査を行っております。



外来予定

月曜・水曜・木曜午前	火曜・金曜午前	木曜午後
一般産科外来	初診外来、妊娠前相談外来	胎児心エコー外来

病理診断科 紹介

病理医とは

皆さんは病理医・病理診断にどのようなイメージをお持ちでしょうか。顕微鏡で組織を観察して病気の診断を行う専門の医師、と認識されている方も多いのではないのでしょうか。病理医はミクロの世界の診断の達人ですが、チーム医療の一員です。内視鏡医が悩む病変、外科医が切除した組織の正確な診断を行い、病理診断は治療法の道標となります。

病理診断科における病理組織診断、細胞診、コンパニオン診断の現状

現在、病理診断科では年間病理組織診断は医科・歯科で約10,000件、細胞診は約8,000件、術中迅速診断は約400件、病理解剖は20件弱実施されています。病理診断科では病理専門医6名、病理専攻医6名、口腔病理専門医1名、口腔病理専攻医1名が診断に当たっており、学部病理専門医4名、病理専攻医5名は主として病理解剖を担当しています。また12名の臨床検査技師が標本作製、ISO15189の維持管理を担当しており、細胞診では7名の細胞検査士、8名の細胞診専門医が在籍しています。地域連携としてがんの病理診断で北大で治療を受けられる患者様の病理診断のレビュー診断も実施されています。

がん医療を中心とする各診療領域にコンパニオン診断・ゲノム診断が導入されてきており、分子標的治療薬、免疫チェックポイント阻害薬などのための各種コンパニオン診断や包括的癌ゲノムプロファイリング検査への対応など病理診断科が関わる診療の範囲も漸次拡大してきています。エキスパートパネルに対応する4名の分子病理専門医も在籍しています。

今後デジタル病理診断やAI画像解析の導入など、時代のIT化とともに、病理が医療にコミットする領域も変化し続けると思います。病理診断科では、医学部の統合病理学教室、腫瘍病理学教室、歯学部の血管生物分子病理学教室、臨床研究開発センター等と密接に連携して、病理診断、病理解剖、病理学研究を進めています。



病理解剖数が減っています

北大病院の病理解剖数は年々減少しています。2024年は14件でした。病理解剖の減少は全国的な傾向です。1980年代には全国で年間4万件あった病理解剖は年々減少して、コロナ前では1万件、その後2023年は6500件とさらに減少を続けています。病理専門医の受験には、24件の病理解剖が必要で、病理解剖が減少すると病理医の育成が滞ります。また初期研修医には臨床病理検討会で症例を担当することが義務づけられています。内科専門医の育成にも必要です。何より、真の病態解明が必要な場合、病理解剖が実施されていなければ詳細な解析はできません。北大の剖検体制は、働き方改革の時代でも24時間電話対応しています。土日祝日、年末年始も実施可です。高度医療を担う北大病院のバックアップ体制としてあるべき姿として、教職員が認識を一致させて皆で頑張っています。病態解明が必要な場合は下記まで連絡してください。病理解剖数の増加にご協力いただければ幸いです。

剖検受付時間（24時間電話対応）

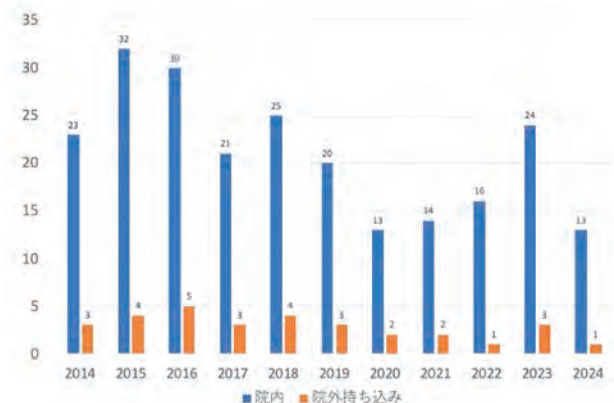
日中：剖検依頼 内線6904、夜間：防災センター

剖検実施時間：

原則8時から20時まで（実施時間は個別の相談可能です）
*北海道大学は外部病院からの病理解剖受託を実施しています（日本病理学会のホームページにて公開）。

診断・研究のご相談：

011-706-5716（直通）



北大病院の病理解剖数(2014-2024年11月まで)

陽子線治療センターのご紹介

陽子線治療センターでは「動体追跡照射法」と「スポットスキミング照射法」という 2つの技術を組み合わせた世界初の小型陽子線治療装置を導入し、2014年 3月より診療を開始しております。

陽子線治療カンサード

当院では陽子線治療をご希望の患者さんに対しても、お勧めする治療法の選択肢は放射線治療医以外の各臓器・疾患の専門医を加えた検討会(カンサード)で一例一例、慎重に決定しています。もちろん、患者さんご家族への詳しい説明と同意(インフォームド・コンセント)の上で、病院全体で最適と考える治療をさせていただきます。陽子線治療を選択された場合には、医師、医学物理士、線量測定士、診療放射線技師、看護師、事務職員など、多職種がチームワークを組んで、治療前・中・後を通して患者さんに最高のクオリティ・オブ・ライフをお届けできるよう努力いたします。

陽子線治療の対象となるがん

前立腺がん、肝臓がん、小児腫瘍、頭頸部がん、骨軟部腫瘍、脳腫瘍、頭蓋底腫瘍、食道がん、肺がん、縦隔腫瘍、肝内胆管がん、膵がん、膀胱がん、大腸がん術後局所再発、その他の固形がんのそれぞれに担当医が専門的な治療を行っています。呼吸などで動く大きな腫瘍に対しても高精度照射が可能で、実時間画像同期陽子線治療(RGPT)として肝臓がん、肺がん、膵臓がん、前立腺がんなどの患者さんに実施しています。また当院は北海道ブロック唯一の小児がん拠点病院で、小児腫瘍の陽子線治療にも重点的に取り組んでおり、麻酔科管理による全身麻酔下での照射にも対応しています。近年保険適応となった小児腫瘍、前立腺がん、頭頸部がん、骨軟部腫瘍、肝臓がん、膵臓がん、大腸がん術後局所再発、早期肺癌(Ⅰ期～ⅡA期)の患者数は増加傾向で、海外からの患者さんも積極的に受け入れています。



陽子線治療センター治療室

陽子線治療は保険診療または先進医療として、公益社団法人日本放射線腫瘍学会(JASTRO)粒子線治療(陽子線治療)の疾患別統一治療方針に準じて行っています。

参考(粒子線治療について)：

https://www.jastro.or.jp/medicalpersonnel/particle_beam/

お問い合わせのご案内

医療関係者の方からの陽子線治療に関するお問い合わせは、当センターHPのお問い合わせフォームからお願いいたします。

https://www.huhp.hokudai.ac.jp/proton/contact/medical_personnel.html

初診体制

月・火・木	午前
予約	必要
紹介状	必要

高齢者歯科のご紹介

高齢者歯科は2001年にスタートした、歯科の中で2番目に新しい診療科です。当科には約20名の歯科医師が在籍しており、年間延べ12,000人以上の外来患者の診療にあたっています。スタート当初から現在でも当科の歯科医師は高齢者歯科、口腔外科、口腔内科、補綴歯科、摂食嚥下など多岐にわたる認定医・専門医・指導医から構成されており、その専門性を活かし、各歯科医師が協調して外来診療を行っています。

外来では補綴治療を中心とした一般歯科、高齢者を対象とした口腔粘膜疾患、口腔乾燥症、舌痛症の治療など、幅広い診療を行っています。また、訪問歯科診療では対応が困難な有病在宅高齢者や外来歯科治療が困難な障害のある患者に対し、短期間の入院下や全身管理下での集中的な歯科治療も実施しています。

本稿では高齢者歯科の診療内容の一部についてご紹介します。

摂食嚥下リハビリテーション

当科は当院の摂食・嚥下専門外来に深く関わりを持ち、口腔がん術後、脳血管障害、神経筋疾患患者などに対し、摂食嚥下リハビリテーションを行っています。嚥下スクリーニング検査や口腔機能を評価した後、嚥下内視鏡検査や嚥下造影検査を行い、機能訓練方法や食形態の指導を行っています。口腔機能に器質的・機能的障害がある患者に対し、舌接触補助床等の口腔内装置の作製も行っています。



舌歪全摘後の腹直筋皮弁による再建症例への舌接触補助装置



当科での嚥下内視鏡 (VE) 研修時の写真

嚥下造影検査 (VF) 時の写真

周術期口腔管理やNSTサポート等の歯科治療往診

当科は2006年に結成されたNSTの口腔ケアチームの一員として入院患者の往診を積極的に行い、とくに造血幹細胞移植患者には無菌室の往診を15年以上専門的に行っています。2016年4月には口腔ケア連携センターが発足し、歯科の各診療科とも協力して全身麻酔手術前の感染源除去、誤嚥性肺炎予防のための口腔ケア、化学療法や放射線療法における口腔ケアなどの専門的口腔ケアに関わっています。



ベッドサイドでの口腔ケア

病棟への歯科治療往診にて義歯を調整し良好な結果が得られた症例

口腔機能を考慮した治療

フレイル(虚弱)の初期症状としてオーラルフレイルを認めることが多く、心身の衰えは口腔からといわれています。当科では一般歯科治療も行っていますが口腔機能の低下が著しい場合は機能訓練を追加した治療を提案しています。また口腔機能を考慮した補綴治療も得意としているため顎義歯(口腔癌術後の義歯)やインプラント治療も行っています。



エナメル上皮腫術後

下顎骨辺縁切除後インプラント義歯治療にて口腔機能が向上した症例

訪問診療

当科では地域包括ケアシステムとの連携が必要だと考え、2025年1月より訪問歯科部門が立ち上がる予定です。まだ実績はありませんが、様々なニーズが必要な高齢者へのアプローチを考えております。

初診・再診体制

初診・再診ともに予約制です。

受付時間は、初診 8:30 ~ 16:00、再診 9:00 ~ 16:00です。ご連絡ください。



当院での肺がん診療について

呼吸器内科 榊原 純

現在、当院では肺がん患者様の診断、治療に関して呼吸器外科、呼吸器内科、放射線治療科等多くの診療科で協力体制を構築しより質の高い肺がん診療を患者様に届けられるように日々診療を行っております。下記の図にて当院の特徴をご紹介しますのでぜひお目通しいただけますと幸いです。大学病院は診断から治療までに時間がかかるという御懸念はあるかとは思いますが図にありますように手術については診断後1-2週間程度で手術が行われるようになりましてかなり短縮されております。

さらにすでにご存じの方も多いかとは思いますが肺がん治療は周術期、進行期治療においてすさまじい進歩を遂げております。

特にII/III期肺がんにおいては多彩な選択肢があり患者様の状況に応じて治療方針を呼吸器内科、呼吸器外科、放射線治療科でカンファレンスにて決定しております。手術については、術前、術後の免疫チェックポイント阻害薬を含む治療が、放射線化学療法においても照射後の免疫チェックポイント阻害薬の投与が患者様の再発予防、予後の延長に大きく貢献するため集学的治療が必要となっております。また進行期肺がんの薬物治療においては、日々新規薬剤の開発が進行しており当院では多数の治験が行われており患者様の治療選択肢が増えることは予後の延長に寄与していると信じております。

このような治療は当院のみで完結できるものではなく地域の先生方との連携が欠かせないものと考えます。先生方とよりよい連携体制を築けますよういつでもご連絡、お声かけをいただけますと幸いです。今後ともに皆様からのご理解、ご協力を賜れますようどうぞよろしくお願い申し上げます。

Respiratory Medicine



北海道大学病院
呼吸器内科
地域医療連携福祉センター
榊原 純

北海道大学病院呼吸器内科は、肺がんに対する個別化医療を実践しています。最新の遺伝子検査やバイオマーカー検査を駆使し、患者さん一人ひとりに最適な治療法を選択することで、高度で効果的な治療を提供しています。

また、抗がん剤治療や免疫療法においても豊富な経験を持ち、全国的な臨床試験にも積極的に参加しています。北大病院は、アカデミアとしてがん診療の中核病院であり、最先端の治療を治験や臨床試験を通じて北海道の患者様に届けることができる数少ない病院です。これにより、患者様に対してより高度な治療選択肢を提供しています。

Radiation Oncology



北海道大学病院
放射線治療科
田口 大志

北海道大学病院放射線治療科は、最先端の放射線治療技術を用いた高精度な治療を提供しています。特に、定位放射線治療(SBRT)や強度変調放射線治療(IMRT)においては高い治療効果を上げており、肺がんに対する安全かつ効果的な治療が可能です。

また、北海道大学は放射線治療のトップランナーとして日本や世界をリードしており、肺がんに対する陽子線治療も保険適応となり、今後さらに飛躍的な進展が期待されます。他科との密接な連携により、包括的な治療を提案できればと思います。

Thoracic Surgery

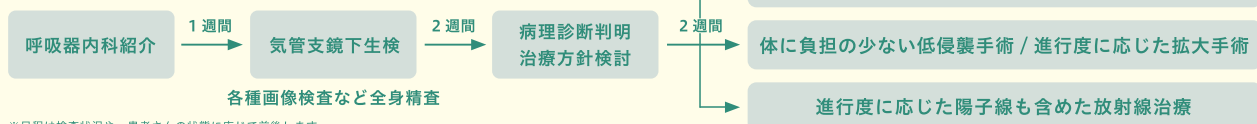


北海道大学病院
呼吸器外科
加藤 達哉

北海道大学病院呼吸器外科は、早期に胸腔鏡手術を導入した先駆的な施設であり、多くの患者様に対して低侵襲で安全な治療を提供してきました。現在では、単孔式胸腔鏡手術やポート数を最小限に抑えたロボット支援手術など、最先端の技術を駆使できる体制を整えています。また、当科は肺移植手術経験者も多く、体外循環補助を伴う拡大手術において豊富な経験を有しています。

このため、他施設で手術が困難とされた症例に対しても積極的に治療を行っており、患者様一人ひとりに最適な手術を提供することを使命としています。当院では他施設では難しい症例でも最先端の技術を用いて治療を行うことが可能です。患者様にとって最良の治療を提供するため、ぜひご相談いただければと思います。

Timeline

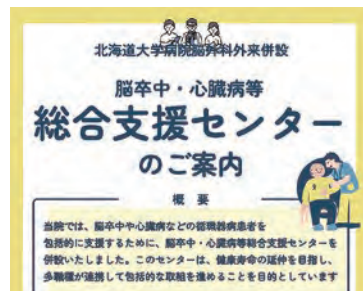


※日程は検査状況や、患者さんの状態に応じて前後します。

北海道大学病院脳卒中・心臓病等総合支援センターの設立

脳神経外科 教授 脳卒中・心臓病等総合支援センター センター長 藤村 幹
循環器内科 教授 脳卒中・心臓病等総合支援センター 副センター長 安斉 俊久

この度令和 6年度厚生労働省脳卒中・心臓病等総合支援センターモデル事業に採択され、北海道大学病院脳卒中・心臓病等総合支援センターが設立されました(図)。本事業は、脳卒中循環器病基本法に基づき、地域医療の質向上を目的として、北海道内の医療機関と密接に連携し、脳卒中や心臓病をはじめとする循環器病の患者支援を強化する取り組みです。地域における診療・ケアの質を向上させるため、さまざまな職種が一丸となり、患者とその家族に対する支援を行っています。以下に、本事業の主要な内容を詳述します。



■ 図

1. 多職種連携の実践

脳卒中・心臓病の治療では、脳神経外科、循環器内科、リハビリテーション科、神経内科の医師をはじめ、看護師、理学療法士(PT)、作業療法士(OT)、言語聴覚士(ST)、医療ソーシャルワーカー(MSW)など、多職種が一体となって地域医療の支援を行う必要があります。これにより、患者一人ひとりのニーズに応じた包括的なケアが提供され、迅速な対応が可能となっています。各専門職が緊密に連携することにより、患者の病状や生活状況を考慮した最適な治療法が導かれ、継続的なリハビリテーションや社会復帰支援を効果的に行うことができます。今年の 11月には脳卒中相談窓口連絡会議を開催し、全道の担当者を一同に介したWEB会議を開催しました。また、循環器科と脳神経外科の合同で、道内の消防隊および医療機関を対象とした実態調査を実施する予定です。

2. 情報提供と啓発活動

脳卒中や心臓病などの循環器疾患に関する啓発活動は、患者さんだけでなく地域住民にも重要な役割を果たします。当センターでは、情報発信を積極的に行い、地域住民に対して脳卒中の早期発見や予防の重要性を訴えています。これらの活動により、地域の健康リテラシーの向上を図り、脳卒中や心臓病の発症を未然に防ぐことが期待されています。今年度は岩見沢市保健センターと協力し、各種健康イベントなどを計画しております。

さらに、啓蒙資材の共同開発や人材育成にも力を入れており、NPO法人北海道医療連携ネットワーク協議会と協力し、啓蒙資材の配布を行っております。

3. 相談支援と就労支援

脳卒中や心臓病などの循環器疾患を患う患者にとって、医療面だけでなく、生活面での支援も不可欠です。当センターでは、患者やその家族が抱える問題に対する相談支援窓口を設置し(本格稼働は 2025年 1月から)、日常生活の不安や医療費、介護、福祉制度の利用方法など、幅広い相談に対応する予定です。

また、今後は就労支援や就学支援に注力していく予定です。これにより、患者が社会的孤立を防ぎ、生活の質を向上させることを目指しています。

4. その他啓発活動

毎年 10月 29日の世界脳卒中デーに合わせて、脳卒中の啓蒙活動が世界規模で行われています。本センターの事業の一環として、札幌テレビ塔をライトアップし、脳卒中に関する啓発活動を実施いたしました。この活動を通じて、地域住民に対して脳卒中の危険因子や予防法について知識を広め、早期発見の重要性を啓発しています(写真)。



■ 写真

編集後記

2023年 10月に入職いたしました医療ソーシャルワーカーの廣田有紀と申します。主に転院調整や在宅調整の業務等を行っております。入職して多くの方に支えられ 1年が経ちましたが学びの多い日々を過ごしております。患者さん、ご家族が安心して生活できるように支援をしたいと思っておりますのでよろしくお願いいたします。

発行 令和 7年 1月

北海道大学病院
地域医療連携福祉センター

〒060-8648 札幌市北区北14条西5丁目

TEL : 011-706-7943(直通)

FAX : 011-706-7945(直通)

<http://www.huhp.hokudai.ac.jp/relation/>